



せいどん  
さきとのりう  
清談常盤石色香

柳亭種彦  
石田芝厚作

志

現  
香石

へ 13  
3583  
1



婦人 大令村刺室

けぢい女目用れ文章とありやを介義訓法れ取

又ハ返相前相の秘傳いさびらおまづすの業ありし

那向病の妙業とあらは那地人業をあたねのんね

男女のお世を介化難の仕相後れ尻尻までま

想じて女の用むを懐さす死なるをうり

○ 丈夫面ハ海軍をともとす志うふ

婦人の切より傍後のつと進まもおふ事ハ

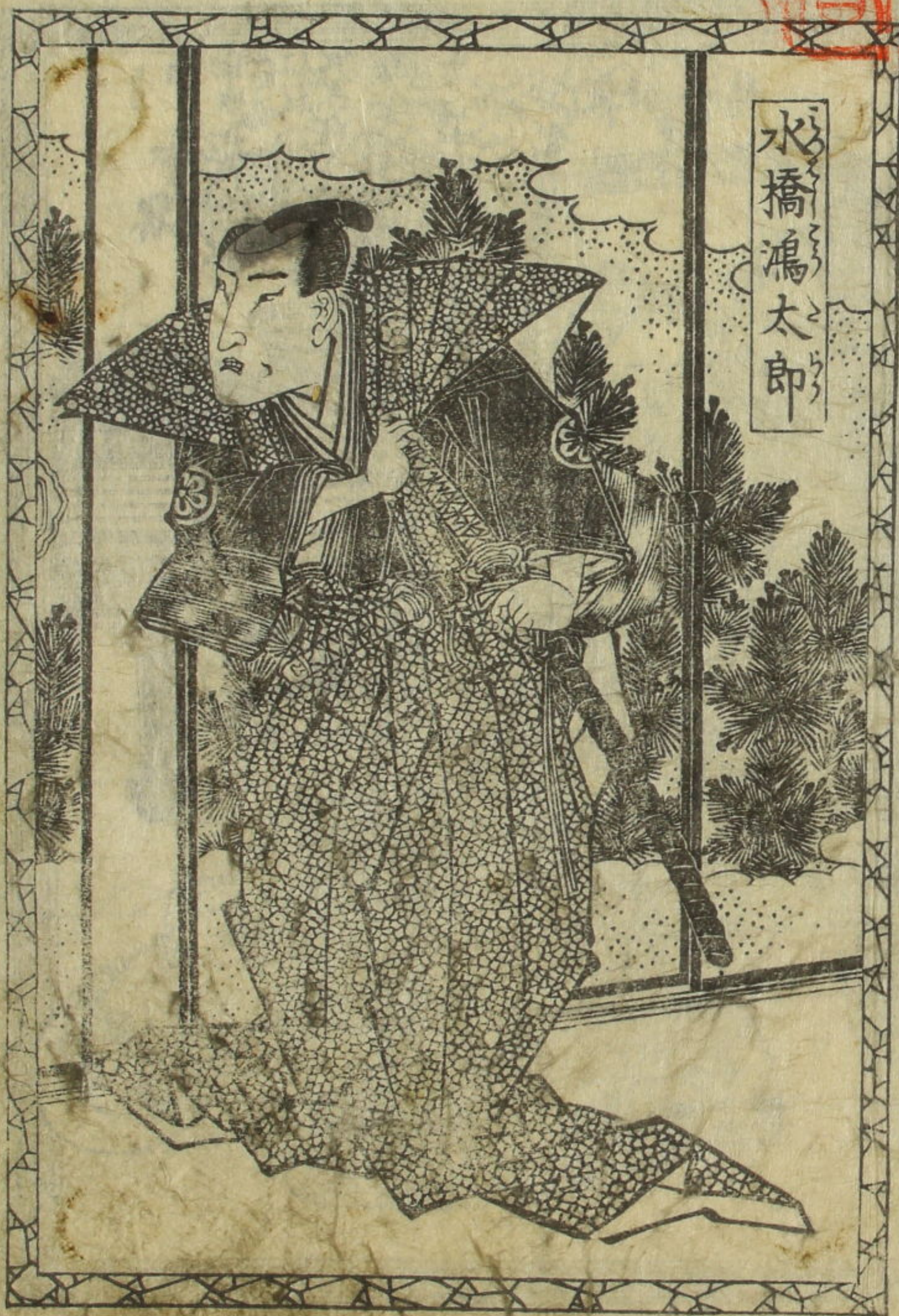
年久くくたさぬもあまは嫁入のときけ本と付るねお

入まきのらぶ文うふ分りよてゆるもるる合せ風の

内きまふらるるまきさうり



水橋鴻太郎



明 13  
 號 3583  
 卷 1



早稲 大學 圖書館  
 35. 2. 2  
 蔵



# 五枚目次并崖畧

心の色

いろはにはへとの四十七字。並様めて一字  
 千金。たぐあろとひふ一句の講釋  
 古文前集の一龍一猪と。踏へて書くる。  
 假字物語此發端

犬櫻

肌の雪ゆき子こ狂くるひつつ尾おとある里さとの友とも  
達たちへ薄情うすぢやうあるハハ犬いぬとよよふ櫻さくらふて。  
花はなふままがふくくハハせりりの日本にほんの司馬しま  
相如さうご加か琴心きんしんあららぬ三絃さんげんの二上にじやうり

戀の間路

招まうぬぬ小棟こどうとする扇あふぎの恋風こひかぜ地紙ぢしの  
色いろの紫むらさとととささり易やすい春はるの夜よれ逢あひ  
瀬せも。ああるることと寝ねと横よこの巻まきより縦たて  
筋すぢへううつつに御幸ごこう町の夢ゆめれ契ちぎ

ひごがのこ

焚たきでもああるる薬くすりとらとらの蔓つるふ生なつつら。  
茄子なすででららああくくててららののららけけ。菊石きくせき顔かほの  
化粧けしやう責せむむ紅血こうけつ鉄皿てつばんの嘯なげふふききららぬ。  
新あたら手たあるる継子ついでこいいびびと

三の徳行

泉水せんすいででの濡衣ぬれぎぬハハ中將ちゆうしやう姫ひめハハ赤あか  
脚あしの拔足はくそく外そとへへとと出いでですすハハ光あきが  
大膽だいたんの根ねざざししるる。小耳こみみふふ挟はさみ  
し水橋みづはしがが行状ぎやうじやう

しほの竹はとてさぐ

しほのあまのさぐ

さぐのうら

さぐのうら

いふちも

うら

ねのさぐのうら

皇都 東の離亭人



印

常磐色香一之卷 一名本朝奈何天

江戸柳亭種彦閑

厚田笠亭仙果戯作

心の色

春の長日の未過る頃欠伸しつゝ西の窓に障子開  
けて人の往遠と見る程雅き比丘尼赤き紐つけたる  
笠被ふ如くおちりた様ふて向の果うる家の軒ふたぢ  
勧進あめり物さひつ椽あふ腰加けたる若人ら

哥うえう。錢多くやらんと笑ひつゝの人の耻るけ  
たもあく

梅の香よ櫻の色よ人のみらよりたぐはくと調子高う

ぞ唄ひりよかゝるゝひの者どもぞ轉りもいづも

ゆきある俗間のうゝひりのあどい耳もゆけぬえせ物

識もあどどとの中くふ思慮浅きなる流瑠璃説經の

たぐひふも折々千金の格言ありて教誨ふある古き

ゆゑあらし此歌あどよく唾をなして味ふべし抑

人とて容貌の美廉あるを願はぬ言やあるべき心とそ

も曲りこもりあゝかごとわらありふべき然れども直

らぬまごかゝかゝるふよだう上ふもようもと作と直る

心の私意お押まであゝきとあゝとあらぬならふべ

の花れどゆらたて八重山吹の實あるはあく唯色との

先とてとまを仕入のをめりの密通あつる男あり

たよりて高貴のか部屋と威ぞあるひ女も裸百貫ふ

て支度金めてええとたり鉄柄たあのおろりかぢ

のたれ手ふ團扇を握らざる幸今時の珠けかりず  
とまも又うつくしきづえむ。たてがあご。あぶら  
のいづら風と流しゆくちてく。いろあるさるふありゆ  
くらんす。てあるたよりの新しきを好むらふ秋ふ  
まぶあふ祇王祇女盛の色もこのまれは色衰ふふ  
とりてへ関寺の小野れ小町苔の衣をかすと人もあし  
させびあざらくの顔色を憐れ憐れみ志あへせよき吉  
ありとも拍子小乗くる浮雲ハ踏えづま舌又目前あり

いづれ拙ぞ守て分さざる。万能ありむ心と道とを  
く人の剃磨きふ。かちふう入て心とまあまぶ心の色ハ  
老朽てもうろろろ。容貞のそあらは。智伎藝のまど  
れらるも又あぢく多くはつく。浅く心ありて徳  
と脩るか。等閑ゆ。人の福もさ入うけ。身やあやまる  
度まゝあららば。かちて手筒う不男う流行かこれとふ  
様ある人の徳もとありて世の用ひあつ。家國をま  
治るゆあり。あゝの意を二句ふこめて。人いこめりな



心こころと入る周しゅう公こう孔子こうしも實じつ々々とあつぎぬべし。あまの  
 ちやくも争まをひえい。あの二句ふたごと物もの小書せうしょき床とこ小せうかけて常じょう  
 味あじひ我われと省しやう人にん小交せうかうるべし。妻つま子こ臣しん妾せうを使つかひ小擇せたく  
 ぶゆも皆みな此こゝ心得こころえとあまふと徳とくの本ほん才さい智ちの末すえ小ありて。  
 用もちひ誤あやまる古ふるあらし。あらしのこあらむと此こゝ二句ふたごハ醜みにくき女め  
 手筒てびやくの男おとこれ替か悶もんとひらた。又また志こころざしと立たてる基もと小ありある。  
 べし。十二じふに言ごの文字もじあざら。かく並ならべ二字ふたご百ひゃく万まん兩りやうの  
 金言かねごとどあまふけし。さきふと心こころと小真まことの道みち小

吐つひあつ醜みにくても才さい智ちあつても耻はにかむあつとすもま  
 真まことの道みち小あまふ。色いろも香かほも捨すてぐ嫌きらひ死しのぬたを色いろ  
 や香かほハ以もつふて心こころを先まづおせよとる。○夫おつとハ死して物もの活いあり。  
 地方ちほうの定さだかならぬ城しろ下した小あまふ。きく信しんとる御ごみむとどらして  
 同おなかどの身み柄がらとて相あ應おう小くら高屋たかや形かたちあつとる女子おんなとて  
 りとる車くるまのを於おちる。西さいれを於おちるととびくもあつとる。こ  
 王わうの如ごとく花はなの如ごとき上うへ髪かみ化粧けしやうの如ごときと涙なみだと琴こと三味線さんまいせん  
 も拙つたかな評判へいぱんの女おんな見みへもあつとる。あまふとらむらむらむて

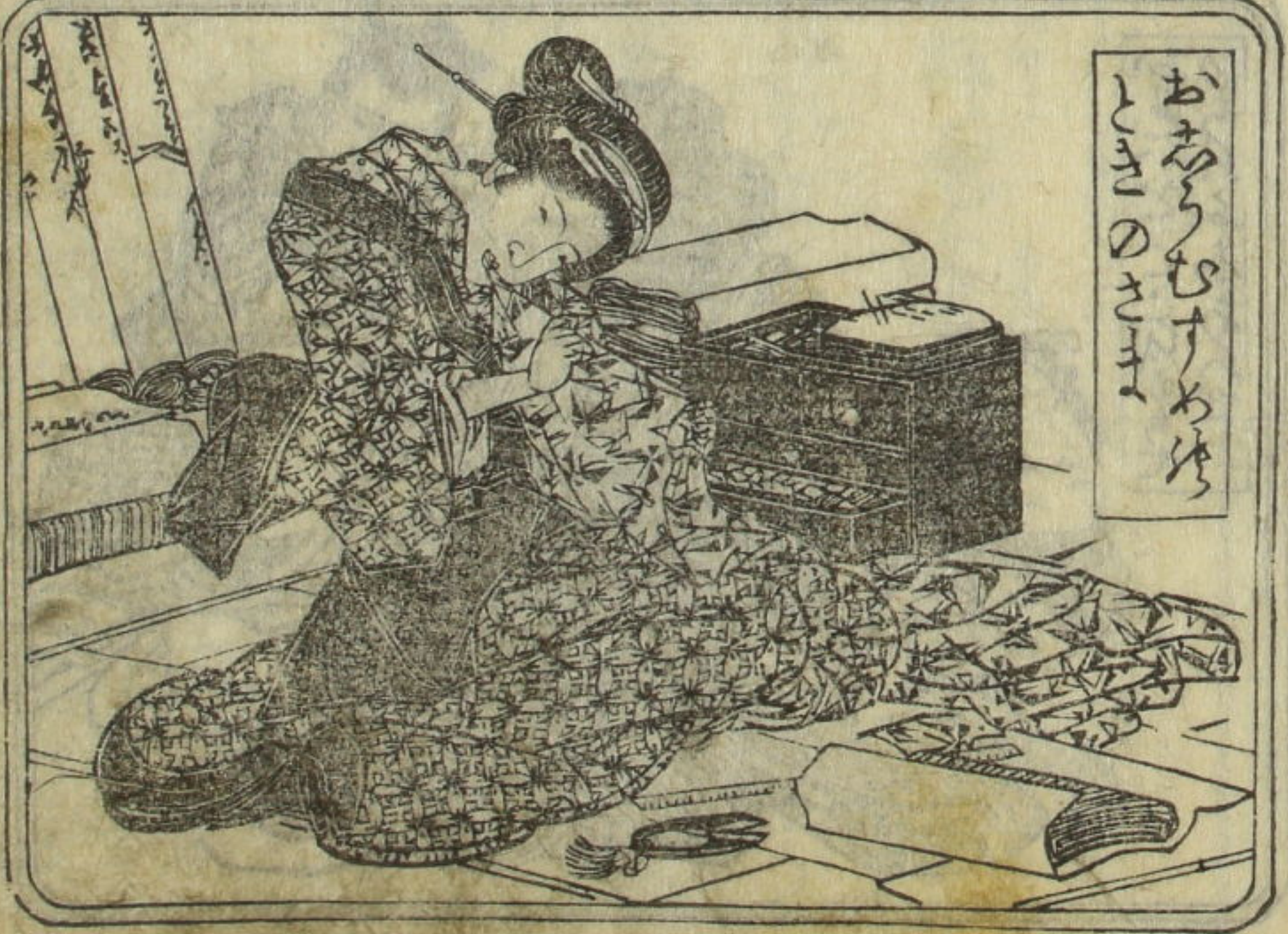
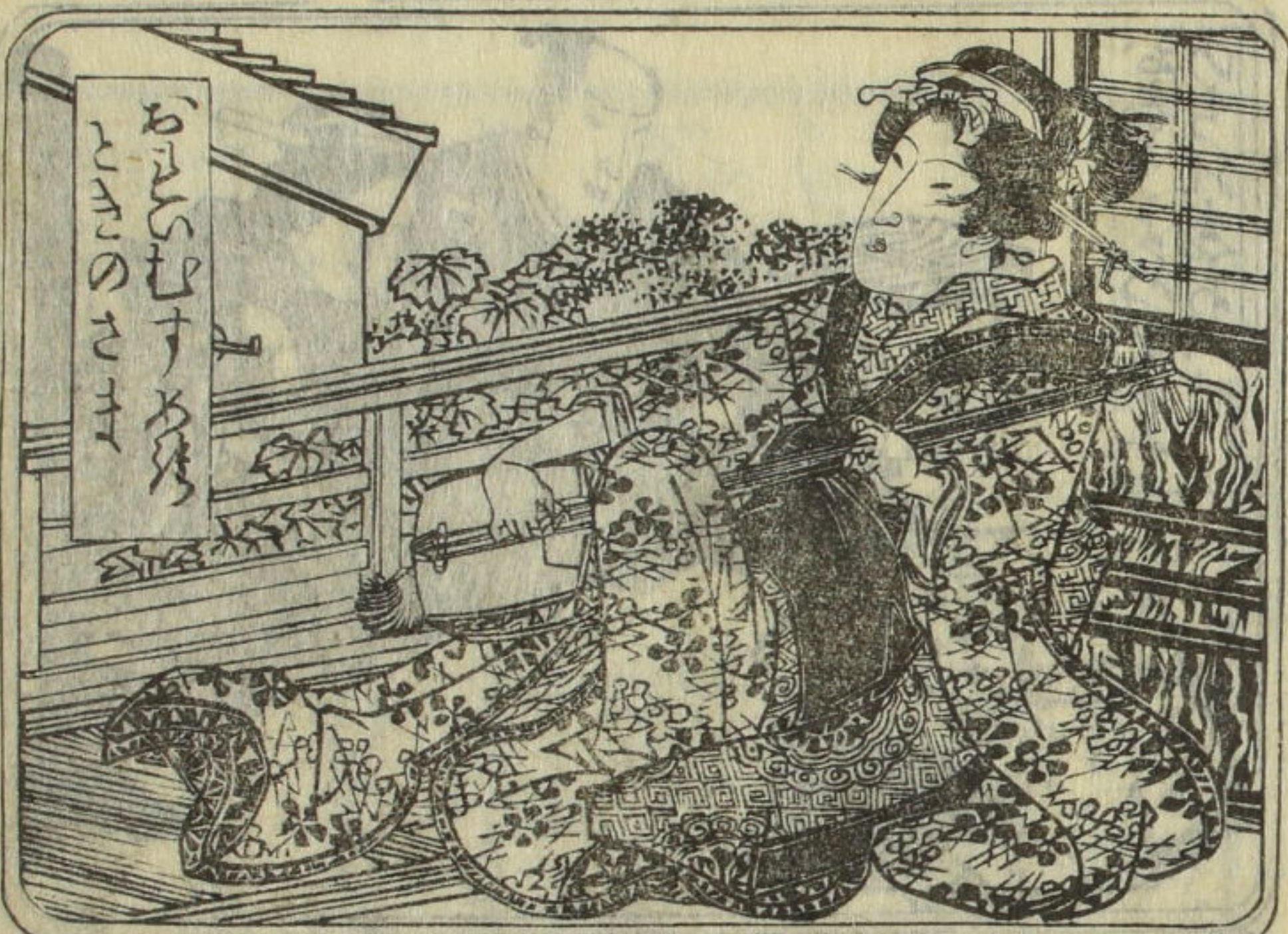
か福の面も色白くあそあそ肌ハ鼠色ふて猫脊ハ目  
 口のつけ所もあつらふらも違はどよめどむら加は代  
 物あつらふ自のしつとをら。剥磨も心ふりもだ。た。深窓ふ  
 あつて織縫ふ精ざら。月日をかろりければ推き折ふ  
 とおとしふも膝と接へ五ッ石十六むさ。とむらび。加十  
 ぞあては。ま。ま。もきやうに。あ。て。行。て。あ。ま。心。も。か。る。醜。婦  
 と立並ぐ。あ。と。外。聞。あ。と。そ。あ。の。づ。ら。ら。疎。遠。あ。あ。と。と。  
 むら。と。ら。の。や。う。も。あ。ら。ず。か。く。て。と。と。頃。ふ。あ。つ。ら。と。

西ハ媒の市とあせど望大きくて容易ふ許さび。東ハ持  
 桑と山とついで好いともありもど惜あ。縁とほくて。  
 互ふたむらとふあつね頃ハ應永年中の夏あれがよめあ  
 う甚穩をらびさる。ち。と。ふ。都。と。と。も。騷。か。一。在。郷。ふ。ハ  
 や。も。ま。も。と。二。揆。を。の。と。市。町。も。強。盗。横。行。く。寶。と。奪。ふ  
 の。も。あ。ら。び。加。は。ゆ。は。婦。ぞ。か。ど。ひ。あ。ど。し。と。り。も。と。百。此  
 あ。と。へ。ハ。盗。入。入。て。た。ま。い。く。お。ま。う。か。ま。の。珠。と。同。道。一  
 て物詰せ。か。入。ら。ま。と。並。木。の。陰。よ。り。と。も。あ。か。る。世。ふ。

身を飾りてくたふ紫縮緬ムササビの小袖こそでふ緋あまの唐繻子たうしふち  
 まふしきや晝夜あけふまの帯おびを結びむすて入いる白雪あらしかき櫻うづら  
 たらちらびの深山ふかやま木きのひたりのぎらあんならひ好す  
 がまじらあらぬ世よを悼なげむてさやぐ麻服あしきの目めをぬる  
 奉書ほうしょのひきまぎらふてちひさた島田しまだややくわのふ  
 れば美うつくしき二倍ふたばい美うつくしき醜みにくき一ひときふふふふふ肥太ふたいと  
 て重おもげあるあまの被かぶぐあむ太儀たいぎと見みてものこめて  
 手てのゆげゆげいひかからんまゝまゝなして軽かろくやらびいひお

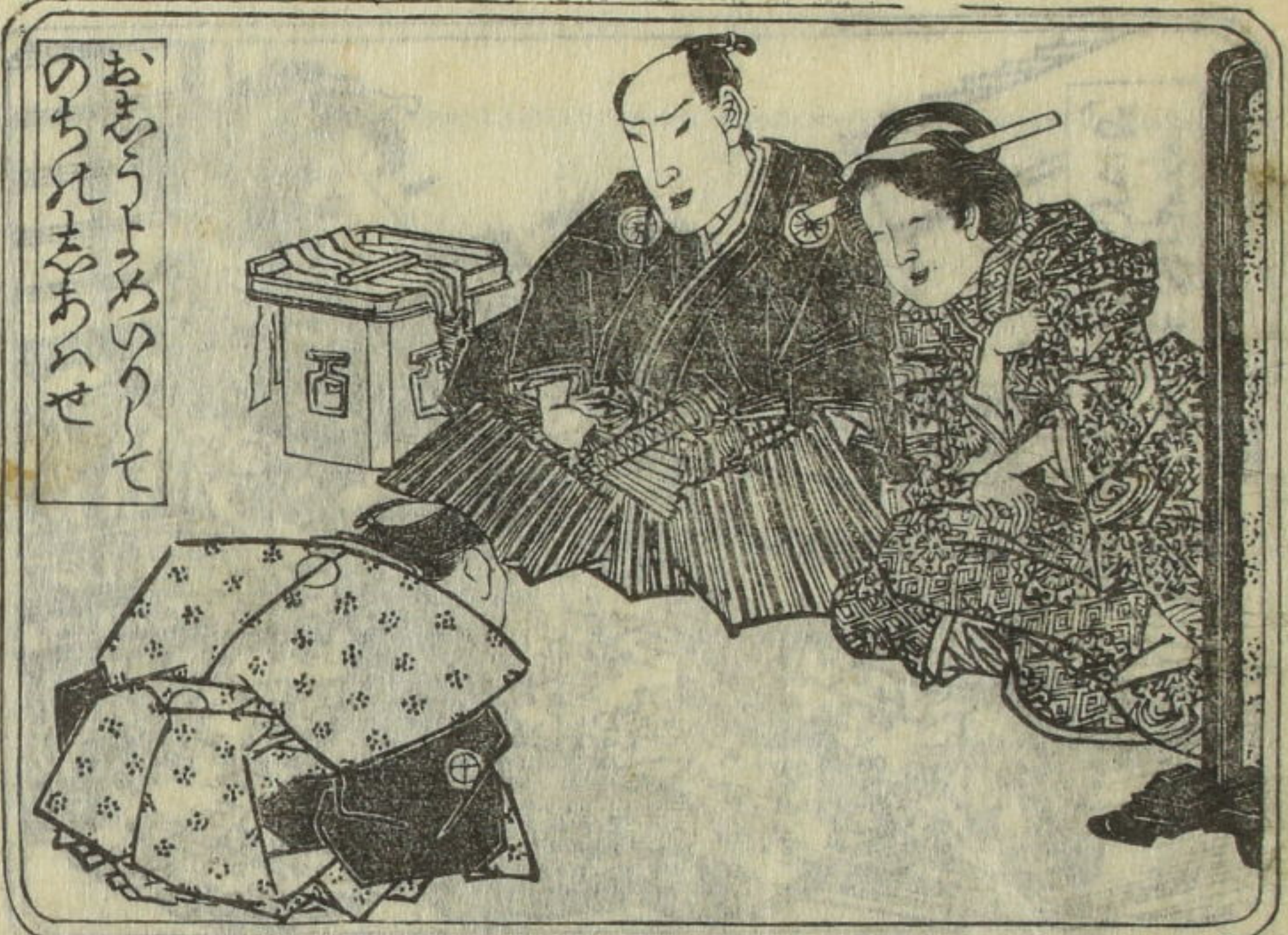
盗人あしひらかきしる  
 そのまゝといひびあひりたかあまのゆ〜りううふきかき  
 お掩おほんとよとほひふまを竭あく錯あやてかどろ〜もまどく  
 又また櫛くし釵し衣服いふくあどあれごふとそ剥むれよと〜今度こんどの危あ  
 難あのがまづいふあはれさひのあ〜あまご其そのもち  
 のよきふよまろかあう此上このうふ又幸さいぞぞ得えてりり此このち  
 ど国の守まもり貧民ひんみんの塗炭とたんふく〜むとあひと米穀こめ  
 あまご施あしゆひりるぞ此このあまうが家いえ廣ひろくてあひひ

も雑穀ざいこくをあきまへへ便べんよくとて此こゝにせよ此こゝあり人  
 の御施行ごせきの場ばと定め役人やくにん衆しゆあへ来て日数ひかずの間滞あひこ  
 留とどまらまひりり奉行ぶぎやう志しの御方ごうへまといちこの盛さか盛さか奉ほう  
 思おもひ企こころまへる御方ごうよて歳としころけととも群ぐんを抽出しゆしゆて徳高とくたか  
 此こゝ君子くんしくりにひりの間まの物ものの暇ひまもあつて夜よつとくふ  
 て持も持も参まゐりりる二三冊にさんの物もの本ほんのよき飽あまひりきま三さんふ  
 何なんと藏くらせる書物しよぶつあらぶかせよとたり人ひとがやがて説部せつぶといふ  
 唐本たうほんの内の二帙にせふ袖中そでちゆう抄せう故こ夏談かたんをどりのありあめものぐかく



おきりむすめ

おきりむすめ



おあつちよりのして  
のちれまあらせ



おあつちよりのして  
のちれまあらせ

る商人ふい似げをも貯へたる哉とやかくくうち見りて  
 かくやど所々聞書まの批評をど書添する見識高  
 し。手もあからず誰がわがごとこのふふとあちあち  
 が徒然の志なき醜婦こそめ縫物の落くばの君も及  
 ぐ。機あるとぎの董永が妻もかくりんとおひるまて  
 あらうへかく書よむ支と暗さる艸帛物語かこら  
 みて漢の和れ経史どむさ入大うこのあきらめよく義  
 理小通ぐらとさる物多うくる顔もせだ父の者

一

十

小て娘むすめが器用きようをあらはしむべからる奇女きぢよともある人ありと  
 りしと此御方このおんかた此書物このしよぶつより心揺こころゆきあらし近ちかき者ものふま  
 小ふしとてかあうが平生このかへやましくみ行厚ゆきあつくやけうとふて  
 婦徳ふとく備あれりされ或時あるとき學問がくもん藝ぎ才さいを賞あやとやうて風流ふうりゆう  
 あり詩うたを作つくて贈おくるもふおしりてきそ秘ひんありふ  
 よめたるのこ和韻わおんとて席上せきじやうふきとあり名なと賣うりんと  
 する女ををどふいあらびかやうの女を二人ふたりとあらじ二満ふたみ三  
 平厭ひらひらふべきふあらびとそ媒まへどりてんうけあひられバ

たちまらち大家おほやまの奥様おくさまとありふりり此御方このおんかたをひく高たか  
 職しやくふ昇のぼりて中年ちゆうねんふりて国守くにのかみの客分きやくぶんとまであるものか  
 是こゝとのものちの正ただし記し故こよき人ひとふ思おもれてよき幸さいを  
 得えるものかむいあそあらむあれかむささきてより多く  
 のあらむと男おとこふあがさ年としのむさして三國さんこくとやらん下しもの関せき  
 とやらん遠とほき湊みなとの遊女あそびぢよとあり富貴ふききの家いへふりけ出いさ  
 る幸さいのあくる年としあきて後のち飛鳥あすか川がはを身みの上うへに  
 粹方すいほうの妾めかけとあり本妻ほんさいの嫉あやむ小若こわく果はむとこふ

わあうと涙のりつも淵とあつらうむせさらうふらうと  
しとあんがまひの美麗の麗の文字の文字かあうの醜悪の  
醜の文字ふあられるものをしと思ひしと今よりして  
あまこと見るとまひの零落の零あうの秀出の秀く  
りりぎまび色ある人も色よりあありてあひの火  
罹りもまびく草屋の里れ妻と争ひ真間の于古名の  
故吏も同じ色ある人の徳あきら金銀と藏むる庫  
の扉は錠とさくぬが如くありびさるきびし心の錠と

まかいて色とたのまび色と誇らび色は火とま  
くまある物ともまびく金銀の勘定あつらふ物ふあ  
らび色はまびくあつらふ物ふあらびとあ  
此一回の發端ふて色と悪く嫌ふは非ふと色は  
悦ぶべくと懼るべき説とあつらう二回目より  
へつぎの物語ふて大意は此条と同どけれ  
別の物語

常盤色色香一畢

Handwritten text in a rectangular frame, likely a list or index. The text is written in a cursive script, possibly Latin or a European language, and is arranged in several lines. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

Handwritten text on the right margin, possibly a page number or a reference mark.

Handwritten text at the bottom right corner, possibly a page number or a reference mark.



